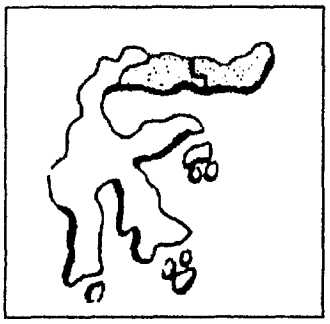


北スラウェシ日本人会
NOTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

謹賀新年

第14号

平成20年（2008）1月

目　次

新年のご挨拶	竹森　祥則　ほか	2
新年のご挨拶	大之木英雄	4
マネンボネンボの慰霊祭経過報告 （第20回慰霊祭報告書から抜粋）	大之木英雄	5
北スラウェシ在慰霊碑について （厚生省への報告書から抜粋）	大之木英雄	8
空からのインドネシア再訪	石野　誠	13
日本語のネイティブ講師	上杉　祐子	16
ジャカルタの日本人事情	上杉　祐子	17
「NPO 手火山設立顛末記	川口　博康	18
ビトゥンと鰹節	長崎　節夫	21
北スラウェシの鳥人	長崎　節夫	25
編集後記		26

新年ご挨拶

在マカッサル日本国総領事館

総領事代理　竹森祥則

後藤総領事は、正月まで休暇で日本に滞在中のため、代わってご挨拶申し上げます。北スラウェシ州には、昨年は総領事はじめ各館員が皆訪問させていただき、在住の在留邦人の皆様にはお世話になりました。今後ともよろしくお願い申し上げます。

２００８年は、１９５８年に「日本とインドネシア共和国との間の平和条約」が発効し、日本とインドネシアとの間に外交関係が開かれましてから、５０年目を迎えます。この間、両国は、経済のみならず、教育・文化・人的交流など幅広い分野で友好・協力関係を築き上げてきました。

２００６年１１月、ユドヨノ大統領が日本を訪問された際、両国首脳による共同声明「平和で繁栄する未来へ向けての戦略的パートナーシップ」が署名されました。その共同声明の中で、国交樹立５０周年を迎えるに当たり、２００８年を「日本・インドネシア友好年」として、様々な記念行事を実施し交流を深めることが合意されました。両国は、この節目となる機会に、両国国民の交流と世代を超えた相互理解を深化させることを目標として、経済、教育、文化・草の根交流の各分野での記念行事を通じ交流を図ることになっています。「日本・インドネシア友好年」を通して、両国が友好・協力関係を更に発展させ、その関係が世代から世代へと継続していくことを願っております。

副領事　松岡晶子

総領事館で広報文化と経済協力を担当している松岡です。昨年３月の巡回医師団同行、６月の後藤総領事北スラウェシ州公式訪問同行の際には、在留邦人の皆様に大変お世話になりました。また、今年２月に、巡回医師団の皆さんと伺う予定ですので、宜しくお願いします。

副領事　川崎春美

皆様、はじめまして。１０月に在マカッサル総領事館に着任しました川崎春美と申します。インドネシアは勿論のこと、東南アジアに足を踏み入れるのは今回が初めてですので、何もかもが新鮮な毎日です。微力ながら何か皆様にお役に立てるようなことがあれば頑張りたいと考えておりますので、どうぞ宜しくお願い致します。最後になりましたが、２００８年も皆様にとりまして素晴らしい年でありますようお祈り申し上げます。

日本国に於ける入国審査手続きについて

在マカッサル日本国総領事館
佐藤祐二

着任して２年半が過ぎました。この間、北スラウェシ州の在留邦人の皆様には、領事業務で色々とご迷惑をお掛けしましたと共にご協力賜り本当にありがとうございます。

今後もご迷惑等、お掛けするとは思いますが、宜しくお願い申し上げます。

我が国に於ける新しい入国審査について、以下のとおりお知らせ申し上げます。

○新しい入国審査手続きについて

１．２００６年５月２４日に出入国管理及び難民認定法の一部を改正する法律が公布されました。その中でテロの未然防止のための規定の整備が行われ、その一環として、２００７年１１月２０日から、日本に入国する外国人に対し（以下の免除者を除く）日本入国審査時に指紋読み取り及び顔写真の撮影が義務づけられました。この指紋読み取り及び顔写真撮影を拒否した場合は、日本への入国は許可されず、日本からの退去を命ぜられる虞があります。

２．免除者

（１）特別永住者

（２）１６歳未満の者

（３）「外交」又は「公用」の在留資格に該当する活動を行おうとする者

（４）国の行政機関の長が招聘する者

（５）上記「（３）」又は「（４）」に準ずる者として法務省令で定める者

３．お問い合わせ先

法務省入国管理局総務課

住所：〒１００－８９７７　東京都千代田区霞が関１－１－１

電話：０３－３５８０－４１１１

ホームページ：http://www.moj.go.jp/

以　上

TOTAL P.03

平成20年1月

新年のご挨拶

北スラウェシ日本人会の皆様

過日、御地訪問の折は、いろいろとご配慮を戴き誠に有難く心より厚く御礼申し上げます。昨年をもちまして、正式の慰霊祭は終了とさせていただきましたが、小生体力の続く限りマネンボネンボにはお参りを続けるつもりです。

皆様には今後一段とお世話に相成るかと存じますが、何卒この岡に眠る英霊のために宜しく、宜しくお願い申し上げます。

ご一同様お揃いで、良き新年をお迎え下さいますようお祈り申し上げます。

早々

マネンボネンボ慰霊碑責任者
海軍第14期飛行専修予備学生　元山戦闘機隊代表
呉水交会会長
広島戦没者慰霊祭委員会会長
大之木英雄

1.　マネンボネンボの慰霊祭　経緯

海軍第14期飛行専修予備学生 元山戦闘機隊は、1987年10月15日、インドネシア国 北スラウエシ州、ビトン市域 マネンボネンボのタンジュン・メラという場所に慰霊碑を建立した。

元山戦闘機隊（以下、元山空と略称）は、元空戦同期特攻戦死者 33名、並びに14 期同期生戦死者、更には大東亜戦争の戦死者を弔う為、国内に於いては昭和 30年代、第14期会として、高野山に“ああ同期の櫻”の塔を建立して、毎年慰霊祭を行い、海外に於いては、各戦跡地に於いて1979年以来、台湾（ガランピ）、シンガポール、インドネシア、マレーシア（コタバル）、タイ、地中海マルタ（第一次大戦）等に於いて、慰霊祭を挙行していたが、その一貫として上記の如く、マネンボネンボに慰霊碑を建立したものである。

（平成14年8月20日 厚生労働省 社会援護局 提出書類参考）

1987年10月15日、除幕式並び第1回慰霊祭には、元山空より40名参加し、貸切バス2台に分乗し、インドネシア国軍司令官 ムルダニ陸軍大将の指示によって派遣された警察署長他、2台の警官先導により意気揚々とマネンボネンボ村に乗込み、マルク海から遙かハルマヘラ、ニューギニア方向を拝み乍ら、盛大な慰霊祭を挙行した。

あの日から茫々二十年 ――――――

毎年欠かさず慰霊祭を現地に於いて行い、この間、

イ. 1992年1月11日には、落下傘降下50周年に当り、落下傘部隊の生存者、兵学校78期有志と元山空19名の合計108名が、碑前に於いて慰霊祭を行った。（之によって旧帝国海軍の正式認知となった。）

ロ. 1998年4月22日には、当慰霊祭は元山空のみならず、第14期会全体の公式行事として認定され、14期会本部より寺尾哲男君、林達雄君、藤井繁君、他多数の参加を得、総員40名を以て、海軍第14期会として慰霊祭を行った。

ハ. 2003年7月20日には、日本国海上自衛隊練習艦隊（司令官 杉本海将補）と合同慰霊祭を挙行。元山空は27名、練習艦隊からは杉本司令官以下80名が、純白の夏の盛装で参加され儀杖隊の弔銃発射の中、未曾有の盛大な慰霊祭が行われた。

海軍軍楽隊の伝統を引継ぐ、海上自衛隊音楽隊の演奏による“同期の櫻”の悲愁なメロディーは英霊の胸裡深く響くものがあったと思う。

本件は、当直将校の年来の念願であっただけに、正に感動の極であった。

以上、元山空が当初、インドネシア国軍司令官の許可をとって独自に建立したマネンボネンボの慰霊碑は、旧帝国海軍、海軍第14期会、日本国海上自衛隊の三者によって正式に認知されたのである。

更に添付資料の如く当慰霊碑は、平成14年8月20日、日本国政府厚生労働省 社会援護局 外事課宛に正式登録されて居る。

平成19年7月、元山空同期生も齢85才前後となり、体力の衰えを自覚し、同期生国内大会に諮り、20周年の今回を以て、公式且組織的な慰霊祭は終りとする旨決定した。

公式慰霊祭を終了するに当って最も苦慮した点は、今後のメンテナンスを如何に行うかである。1987年、北スラウエシ州観光局長パレーラ氏、並びに実行窓口のサルンダヤン ビトン市長（現 北スラウエシ州知事）と、元山空責任者 大之木との間に交された契約書並びに口頭協約によれば、

イ. 土地の購入、慰霊碑の建造並びに関連設備の建設等は、元山空の負担に於いて実行し、完成した慰霊碑全体を北スラウエシ州政府（窓口ビトン市）に寄付する。

ロ. 完成後の碑のメンテナンスは、北スラウエシ州政府の負担と責任に於いて行う。

ハ. 慰霊碑の運用に関しては、元山空の意思によって行う。

大体、以上の如く定めたが、実状はメンテナンスについて満足すべき状態とは云えず、毎年元山空（担当 大之木）が慰霊祭で現地に臨んだ節、現地の土地の売主カナウン氏、現地マネンボネンボ村の村長、メナド旅行社 PANDU EXPRESS 等に依頼して、維持管理、補修を行い、その費用は元山空に於いて支出している状況である。

従って、公式慰霊祭を取り止めた後、維持管理はどうなるか、という点は誠に憂慮される問題である。

この対処方法として、下記の如く考えた。

a. 北スラウエシ州政府のサルンダヤン知事、スワラン副知事に熱意をもって説明し、契約条件を想起せしめ、改めて碑のメンテナンスについて強く要望する。

b. 在マカッサルの日本総領事 後藤昭氏に既にご存知ではあるが、委細再度説明し、元山空の現地訪問無きあと、現地ビトン日本人会ともご連絡願い、当慰霊碑の維持管理について善処方、お願いする。

c. ビトン日本人会の平野代表幹事、長崎事務局長にお願いし、現地に居られる日本人として当慰霊碑を日本人墓地同様、面倒を見て戴くよう、再度要請。

d. 現地マネンボネンボ村の村長、前村長、小学校長、地主カウナン氏、20年前の招待小学生児童等 計80名を、7月4日メナドのホテルに於いて感謝パーティーに招待、今後のご協力とご配慮を依頼する。

以上の対策を講じたわけであるが、之で充分とは云えず、小生健在の間は、プライベートにお墓詣りをする予定であるが、更にこの実態をご認識の上、日本政府の外務省、防衛省、厚生労働省、海上自衛隊、水交会や後世若者たち有志のご理解とご支援を戴きたいと切望するものである。

現地は正に赤道直下、放置すれば数年後には、当慰霊碑は瓦礫と化すのは必然であり、若しそういう事態になった場合、英霊に対し誠に申訳けない仕儀となるので、憂慮に耐えない点である。

平成１４年8月２０日

厚生労働省　社会・援護局
外事課　　野　口　　様

元空戦の集い
世話人　　大之木　英　雄
（呉水交会会長）

インドネシア国北スラウエシ州在慰霊碑について

1．報告者

財団法人水交会呉支部会長
呉水交会会長
元海軍飛行専修予備学生　元山海軍戦斗機隊　海軍中尉
広島護国神社責任役員

大之木　英　雄
〒737-0078　呉市平原町２４－５　☎０８２３－２４－４６６８
（昼間）〒737-8503　呉市中央３－８－２１　☎０８２３－２６－１５２２
（株）大之木ダイモ　（秘書　青木広美）

2．慰霊碑所在地

インドネシア国、北スラウエシ州、
ミナハサ、ビトン市地区マネンボネンボ村、タンジュン・メラ
（北スラウエシ州観光局の観光地図に Japanese Monument として掲載されている。）

TANJUNG MERAH, MANEMBO NEMBO, BITUNG, MINAHASA,
NORTH SULAWESI, INDONESIA

3．慰霊碑建設日及建設者

１９８７年１０月１５日落成。除幕式実施。元海軍第１４期会元山海軍戦斗機隊この碑を建設す。
責任者　大之木英雄

4．慰霊対象

昭和１７年1月１１日、碑所在地近傍のカカス高原のランゴアン飛行場に落下傘降下せし、横須賀鎮守府第一特別陸戦隊、堀内落下傘部隊、同じくビトン南方のケマ地区に敵前上陸せし、佐世保第二特別陸戦隊の戦死者、及び陸軍第１０８飛行場大隊、第３７５独立歩兵大隊の戦死者、並にニューギニア、ソロモン群島、ブーゲンビル、ラバウル他、南太平洋海域に於ける戦死者、又、

無実の罪を背負ってB級戦犯として処刑された堀内豊秋海軍大佐他、当地区に於て戦後戦犯処刑された方々の霊を慰む。

碑面の「慰霊のことば」

（表）　鎮　魂

風薫り　雲は流れ　海碧き

南溟のこの地　君よ　永遠（とわ）に眠れ

（裏）　１９８７年１０月１５日

元海軍第十四期飛行専修予備学生

元山戦斗機隊建之

5．建立までの経緯

元海軍第１４期元山戦斗機隊の戦友会は「元空戦の集い」という名称のもとに国内の慰霊は元より、１９７９年より東南アジアの戦跡地に於て慰霊祭を執行することを常とした。１９８７年に元山航空隊の中攻隊（元山は戦斗機隊の前は攻撃機の隊であった）が横須賀鎮守府第一特別陸戦隊のメナド落下傘降下部隊を輸送したというご縁もあり、メナド地区で慰霊祭を挙行することを決した。

責任者大之木は事前調査の為メナドに赴いたが、慰霊碑は存在せず、たまに見かける桧づくりの墓標は概ね２年で腐敗損壊することを知り、帰国後元山航空隊の仲間とはかり、メナド地区に元山の手で慰霊碑を建立すると決した。

人を介し、北スラウエシ州知事に面会し、事情経緯を述べ、州政府の承認を受け着工することとした。知事の命令でビトン市長　サルンダヤン氏に土地の選定、その他、建設について便宜提供が指示された。

責任者大之木はサルンダヤン市長と共に３カ所の土地を見学し、現在地を決定し、メナド所在の建設業者と契約し、施工せしめた。知事の承認は１９８７年3月、建設着工は１９８７年4月頃であった。１９８７年9月、北スラウエシ州知事より突然呼出があり、「外国軍隊の慰霊碑は州知事権限ではなく、ジャカルタのインドネシア国軍司令官の権限であるのでどうしたものか」と非常に困惑した表情であった。

責任者大之木も愕然としたが、メナドより急遽ジャカルタの日本の駐在防衛官（海上自衛隊）松浦聿永一佐に電話し、国軍司令官ムルダニ陸軍大将への口添えを依頼。松浦一佐はかねて昵懇の副官スウォンド空軍少将を通じ、国軍司令官に依頼してもらい、幸いにして２週間後正規にインドネシア国軍司令官ムルダニ大将の承認を得た。

従って、当慰霊碑は国軍司令官、並びに北スラウエシ州知事の両名によって正式に承認された日本軍戦没将兵の慰霊碑である。（注：尚同じく国軍司令官に正式承認を受けた日本軍の慰霊碑としてイリヤンジャワのソロンに日本陸軍のつくったものがある。）

尚、１９８７年１０月１５日、元空戦の４０名が除幕式、並びに第１回慰霊祭等の為に到着した時はムルダニ国軍司令官の命により、メナド警察署長が一行滞在中警固に当ってくれた。

6．慰霊碑の所有権等

１９８７年4月、北スラウエシ州知事（サルンダヤン・ビトン市長立会）と「元空戦の集い」世話人大之木との間で契約を締結、署名を行った。内容下記の如し。

（1）土地の購入、並びに慰霊碑等建造物の建設費はすべて元山航空隊負担のこと。

（2）メンテナンス費用は北スラウエシ州政府が負担する。

（3）慰霊碑の実質的使用、慰霊祭等の執行その他はすべて元山航空隊の自由な意思によって行われる。

（注）1．メンテナンスは州政府負担となっているが、支出経費が少いか、或はどこかに消えているか、現地の維持管理者（マネンボネンボ村長レンコン氏、及び元の地主カウナン氏）に充分渡っていない。その為絶えずトラブルがあり、当方へ支払方要請あり。契約に違背するので問題であるが、所要額の半分位を毎年元山が負担している。

2．このような状況で毎年当方が現地に行き点検をしないと急速に慰霊碑は破損してくる恐れがある。

7．慰霊碑の規模

（1）土地　　約1，０００坪（所有）

（2）門

（3）塀

（4）構内トイレ

（5）石段１００段余り

（6）慰霊碑本体　　（参考：写真）

8．慰霊祭

（1）毎年1回4月、慰霊祭を行う。「元空戦の集い」主催。１９８７年より２００２年に至まで１６回の慰霊祭実施ずみ。

（2）現地よりビトン市長、郡長、レンコン村長、小学校長2名、小学校児童３０～７０名参加。その他地元有志が参加。

（3）１９９２年1月１１日、落下傘降下５０周年に当り、落下傘部隊の生存者、堀内隊長の教え子海兵７８期、並びに元山戦斗機隊員計１０８名碑前に於て盛大に慰霊祭を行う。

（注）毎回来賓、並びに児童には、

a．文房具等の土産持参。

b．慰霊祭の度毎に当方の寄付せし鯉幟りが高く空に舞う。

c．現地手配者

PANDU　EXPRESS（旅行社）

レンコン（マネンボネンボ村村長）

カウナン（元の地主）

9．在外公館

１９８７年１０月、南スラウエシ州ウジュンパンダンの日本総領事館へ大之木以下１０名表敬訪問。メナド慰霊碑の件を報告。

10. 碑の損壊度合

毎年元山の者が点検し、不良個所、損壊個所を現地業者に指示して修理せしめているが、赤道直下の地である為、損壊のスピードが早く、「元空戦の集い」責任者の高齢化と共に今後が憂慮される。

11. 元山空の維持費

生存同期生は５～６０名、その内出席してくるのは２～３０名。当初建設の時集めた資金の内、余剰金があり、之と国内、海外の「元空戦の集い」の行事で余った残金を基金に寄付してもらって維持費にあてている。

12. 将来の問題点

「元空戦の集い」の責任者大之木が健在の間は毎年４月現地を訪れ、州政府、市、村、地主等への挨拶、交渉を行うので特に心配はないが、責任者も既に高齢（８０才）であり、余り長期のお世話が期待できない。

契約書の約定によれば、北スラウエシ州、並びにその下部機構のビトン市、及びマネンボネンボ村長が碑のメンテナンスの費にあたることになっているが、予算も乏しく、又予算があっても中途紛失している場合が多く、之によって碑のメンテナンスが充分に行われるとは到底期待できない。

責任者の知人、身内で後事を託せないかとも検討してみたが、資金と心の両面に於て期待しがたい。

ついては、今後の維持管理は日本政府（厚生労働省）に於てご担当戴けないかと切願する次第である。

維持管理の方式としては、年に１度担当者が参拝し、その折現地関係者（市長、郡長、村長、小学校長、旧地主）にご挨拶を行い、村長立会の下で現地の実際管理実行者（現在は地主カウナン氏。将来はカウナン氏のご子息がよからん）に年間維持費担当分（日本円２～３万円）を支給すればよろしいかと愚考。

尚、メナドに於て北スラウエシ州知事を表敬訪問し、マネンボネンボの碑について感謝とお願いをして戴く。

参考までに、メナド市、ビトン市、ミナハサ郡一帯、マネンボネンボ村の市民、町民、村民は極めて親日的、且温厚なり。

又、当慰霊碑は北スラウエシ州観光局の手によって観光地図に掲載され、「Japanese Monument」（日本記念碑）とされている。

以上、宜敷お願い申し上げます。

（備考）

1．関係地図添付

2．慰霊碑写真６葉添付

3．慰霊祭式辞　慰霊の言葉添付

空からのインドネシア再訪

「空からのインドネシア再訪」と書くと非常に豪華で洒落た旅行をしているかに感じられでしょうが、そうではありません。それならば、あの事だろうとお気づきの方もおありだろうと思います。アメリカのNASAが気をきかせて、ネット上に「グーグル・アース」を公開してくれたお陰で、宇宙飛行士なった気持で短時間に無料で世界のどこでも、好きな所へ飛んで行けるようになりました。これを利用しての話しなのです。

私の仕事が建設関係なものですから、定置型ではありません。それでかなりインドネシア国内を動き回りました。時々、空からもと働いていた工事場所を「視察」するのが楽しみになっています。

インドネシア西端のアチェでは、１８年ほど前、市内を流れるクルンアチェ川に「スラバヤ橋」を架ける仕事に携わりました。2004年12月に起きた「スマトラ沖地震」の影響が気になっていましたが、空から観察しましたところその影響は何ら受けておらず十分機能しているようで、ホッとしました。

その隣の北スマトラ州では、アルミ精錬施設一環工事、つまりアサハン・プロジェクトに参画しました。トバ湖から流れ出るアサハン川の水を利用して地下発電所で電気を起こし、それを１００km先の工場まで送電線で送ってアルミを精錬しようとするものでした。世界でも珍しいメガプロジェクトと言われていましたし、私にとっても忘れがたい工事の一つですので、時々空から訪れるのですが、今もって画像がボケていてどうしても詳細を見せてくれません。自分の家でも、外に置いてある自転車まではっきり見せてくれるのに、不思議でなりません。

ジャワ島では、観光資源となっているボロブドウール・プランバナン遺跡造園工事に参画しました。あの石積で世界遺産になっている２つの寺院が、2006年５月に起きた中部ジャワ地震の被害を受けているかと思うと心が痛みます。しかし、今出てくる画像は地震前のままで、これがかえって疑心暗鬼を引起し遺跡被害は画像で見せられないくらい酷いのではないかと思ったりします。前記のアサハンと同様、確認をしに出かけたくなります。

私が始めてインドネシアに入国したのは、東京オリンピック終了直後の1964年11月でした。それで直ぐ東部ジャワ州のブランタス川系に建設するカランカ

テス・ダム現場に赴任しました。この川は東部ジャワを「の」の字のように回っているのですが、名で判るとおり雨季には荒れ狂い（ブランタス）、中流トルンアグン市近辺から下流を大きな湖にしてしまう悪者でした。今、空から訪問しますと、この季節湖は大稲作地帯に変貌していました。洪水を調整するというダムの機能を十二分に発揮し、地域住民に貢献しているのを見て胸に熱いものを感じました。

2001年、ビトンのコンテナー埠頭工事に移る前は、中部ジャワのスマラン港で、同種工事に5年間携わっていました。この地は、工業化が進みそれにつれて地下水を多量にくみ出すようになったことから、地盤沈下が著しくなってきています。急速な工業化の悪弊が出ています。画像には、マウスを当てた地点の標高が出ますので、データは古いとは思うもののついつい標高をチェックしてしまいます。

このあと、ビトン港では西テイモールのクパン港のコンテナ埠頭工事と兼務になり、ビトンをねぐらとして両港の間を行き来していました。

仕事が完了しビトンから帰国後、何度も上空から仕事をしていたコンテナー埠頭を眺めているのですが、しばらくご無沙汰している間に当時無かった大きな工場が港とジャラン・スカルノ・ハッタやPTセメントナサのサイロの間に出来あがっているのに驚きました。計画があることは知っていましたが、こんなに早く出来上がるとは思いませんでした。

クパンは空から見ますと全体に白っぽい島です。石灰質の多い土地であることが良く判ります。

目下、女優の森光子が日経新聞「私の履歴書」に連載していますが、戦争中芸能人による慰問団に加わり、バリクパパン、マカッサル、ケンダリそしてクパンを訪ねたとあります。あのお方、インドネシアを知っていたんだ、と思いましたら余計身近に感じるようになってきました。しかし、悲しい文章が続いていました。引用させてもらいます。昭和18年（1943年）クパン飛行場でのことだそうです。

> ある日、夜明けに起こされた。「お見送りしてください」
> どんな作戦かも、どこへ出撃するのかもわからない。ただ、帰りの燃料を積んでいないんじゃないかと慰問団に人たちは話していた。

エンジンの音がするまで、咳をしてもわかるほど静まり返っていた。暗闇で飛行士の顔も表情もわからい。第一、正視できなかった。
私はこっそり持ってきた小さなマスコット人形を飛行士の方のベルトにそっとつけて差し上げた。とがめられるかと思ったら、怒られなかった。一言も声をかけられない。ニュース映画のように手を振ることもなく、静かに深くお辞儀をしてお見送りした。
胸がつぶれる思いで、泣くというのでもなく、ただ涙が自然ににじんできた。
（中略）
お見送りは何度かしている。けれど後々まで思い出されるのは、あのときのクパンの出撃だ。

ビトンの上空に来ると、港や居住していた宿舎の他に必ず探す場所がある。移設の終わった日本人墓地であるが、いつも上空に雲がかかり山の中腹までたどりついて、それいじょうは見られないのが残念である。新しい画像に変わり墓地を見出すまで、追い続けると思う。

前日本港湾コンサルタント駐在員
石野　赫

日本語のネイティブ講師

ビーナヌサンタラ大学
日本語講師　上杉祐子

2007年2月初旬、洪水で大混乱のジャカルタへ引っ越してきました。現在は西ジャカルタにあるビーナヌサンタラ大学で日本語を教えています。一つは日本へ渡航するITエンジニアの日本語研修で、約1年間で日本語能力試験2級程度の日本語力をつけるコース。そしてもう一つは大学の文学部日本語科で中級の日本語を教えています。北スラウェシでは大学卒業時に日本語能力試験3級になっていればいい、という風潮がありましたが、特に日本人講師のいない大学ではジャカルタでもレベルは同様です。でも、日本人、つまりは日本語ネイティブがいるところは、比較的日本語力が高いように思います。ビーナヌサンタラ大学はコンピュータ専門学校から始まった大学で、文学部はまだ5年ほどしかたっていませんが、日本人専任教員も継続的にいます。その影響の一例とも思えることとして、日本語弁論大会で連続入賞を果たしています。ですから、北スラウェシで日本語を学んでいるマナド国立大学、サムラトランギ大学へ派遣されていた日本語講師が中断してしまったことは、とても北スラウェシの日本語教育の損失とも思えます。一方、私が北スラウェシで在職していたミナハサ日本語研修センターも日本語ネイティブが中心となって教えている日本語学校ですが、2006年に続き、2007年も日本語弁論大会予選を勝ち抜いて全インドネシア大会に出場することができました。

しかし、ITエンジニアのコースにおいて大学で4年かかる日本語修得が1年約1000時間でできるというのは、日本語ネイティブ講師の成果（も少しはあると思いますが、それだけ）ではなく、研修生たちのモチベーションによるところが大きいです。インドネシアから日本へ行くことだけでも大変なのに、研修ビザではなく、就労ビザを取って日本でITエンジニアとして働ける機会を得られるのですから。もちろん2級レベルの日本語というのは日本人と一緒に仕事をするには十分ではありません。渡航後も日本語を研鑽することを見込んで、日本の在留許可書を取得できるのです。5月末に7人、7月末に6人の第1期研修生が日本へ旅立ち、7月から第2期の研修が始まりました。

北スラウェシに比べて、ずっと日本人が多く、日系企業も多いジャカルタですが、日本人日本語教師はそれほど多くありません。やはりここでもインドネシア人日本語教師が中心となって日本語教育が行われています。約1万人も日本語ネイティブがいるにも関わらず不思議なくらいです。そのような環境の中、ITエンジニアの日本語研修を私と同僚の2名が専任で担当し、日本語学科のほうも専任に加えて私が授業を担当しているとあって、ビーナヌサンタラ大学は他大学と異なっています。それは私立大学で資金に余裕があり、外国人である日本語ネイティブ講師を雇えるからということのようで、授業や学生との連絡、宿題提出もコンピュータのネットワークを活用しているなど、大学の設備や運営も充実しています。以上、ジャカルタからの近況です。連続した休暇には北スラウェシに戻ることもありますので、また皆様お目にかかりましょう。

ジャカルタ日本人事情

ビーナヌサンタラ大学
日本語講師　上杉祐子

私にとって昨年は、ジャカルタに引っ越して大きく生活環境が変っただけでなく、北スラウェシと首都ジャカルタとの違いを体験できました。インドネシアに来て最初に住んだところが北スラウェシで、学校理事の青木次郎さんに言われるまま(?)、北スラウェシ日本人会に入会。でも、誰でも歓迎してくれて入会という「形式」はないようなものでした。在マカッサル日本領事館にも日本人会経由でいろいろお世話になりました。領事サービスや医師団訪問だけでなく、地震の時に一人ずつに気を配って、連絡をいただいたこともありました。企業や政府からの派遣ではない日本人にとって、このような日本人会のネットワークは心強いものです。

一方、ジャカルタ。だれからも日本人会（ジャカルタジャパンクラブ＝JJC)の誘いはありません。ジャカルタに住んでいる多くの日本人は企業の駐在のため、企業そのものが日本人会を支えているような感じです。インターネット http://www.jjc.or.id/で調べたところ法人会員だけでなく、もちろん個人部会の会員も募集しているし、なんやら楽しそうな「クラブ活動」もあるのですけど、女性が参加できるクラブはすべて平日の昼間。駐在員の奥様の社交クラブなのでしょうか。女性で単身で来ていて平日勤務している人だって、ジャカルタには結構いると思いますが、日本人会には参加しにくい状況があります。それでも日系コミュニティの中心であり、JJC は「会員の相互親睦及び日本・インドネシア両国の親善、文化交流をはかる」ならびに「両国間の通商及び経済協力に寄与する」という目的があるのだそうです。

たとえば鳥インフルエンザ。北スラウェシでは大使館医務官が足を運んでくださって詳しく説明を聞いたことがありました。でも、ジャカルタでは大使館も JJC も在留邦人一人ひとりの健康管理に関わることはなさそうです。企業に所属している人の話を聞いたところ、非常時にどのように対応するかは企業それぞれで決めているということでした。インドネシア各地で鳥インフルエンザにかかったり、亡くなったり人が増えているのに、ジャカルタでは一見何も関係ないような様子ですが、私は結局、レストランで鳥肉、卵料理を食べても、自分で買って調理することはできないまま、1年が過ぎてしまいました。

インドネシアの広く、人口も多いですが、ジャカルタに何もかも集中しています。そのジャカルタに住むことは厳しい現実がある反面、何でも可能のように思います。しかし、**日本人だからといって日系コミュニティに依存することはできないのではないでしょうか。**逆に、私のように日本人とネットワークを作らないままでも、ジャカルタでは問題はありませんが、北スラウェシ日本人会に籍をおいたことがあるだけに、ちょっと寂しい気もします。インドネシア各地の日本人会がどのような様子なのか知りませんが、ジャカルタと北スラウェシとは両極端なのかもしれません。そんなことから、これからも北スラウェシ日本人会の方々とのつながりを持っていたいと思っています。

２００７／１２／２９
川口　博康

「ＮＰＯ手火山」設立顛末記

今年も残すところあと二日、あわただしい中にも昨日家の掃除を家内と済ませ新年を迎える準備に気持ちが切り替わってきました。
そんな中、先週ビトンの長崎さんから電話があり「タルシウスの原稿」について指名があったこと思い出し、今朝は少し早起きをしてパソコンに向かっているところです。
まずは長崎さんのご回復を心からお喜び申し上げます。本当に良かったですね。

さて、私にとっては今年の出来事のトップに持ってきたいのが標記の「ＮＰＯ手火山」を立ち上げたことです。きっかけはアルバイトの仕事も昨年からぐっと減らしていっている中で何かに挑戦したいという想いが湧いてきました。
お金儲けの仕事、人様からお金をいただく事はプレッシャーも感じますので違った形のものを探しているなかでＮＰＯ＝特定非営利活動法人のことが目につくようになりました。
ご承知のように私の住む町、御前崎も一昔前までは遠洋漁業が基幹産業でした。
しかし、ここにきて時代の流れはこのような産業を消し去ってしまいました。寂しい限りです。このような中で同志１０名が集まり「町おこし・地域活性化など」をやってみようということで以下の設立趣意書をまとめ会員を増やすための活動とＮＰＯ設立の書類作りに取り掛かりました。司法書士さんに依頼すればお金さえ払えば済むのですが会費全部をつぎ込んでも足りないという事になり自分でやるしかないという結論になりました。
このようなことは経験がありませんでしたので冷や汗ばかりでしたが何とか１１月末に静岡県の認証を得、法人登記、その他あちこちと書類を出して何とか船出する事が出来ました。こうして第一難関はクリアーしたのですが次に待ち受けていたことは「お金集め」でした。初年度の事業計画を実施するには１５０～２００万円のお金が必要です。
何も実績の無い者に世間様はそんなに甘くない事を改めて実感しています。それだけに頂いたお金の重みを噛み締めています。身が引き締まる思いです。
お金から遠のこうと思っていましたが人間生きていくためにはお金との腐れ縁は吹っ切れそうにないのではと思うこの頃です。このような状況ではありますが必要資金のメドが何とかつきそうなところまで漕ぎつけています。そういうわけですのでお正月も無事迎えることが出来そうです。
来年は「炎と直火（ジカビ）」にこだわりここからエネルギーを貰う積りです。
どうぞ私共の「ＮＰＯ手火山」に興味を持たれた方は以下の「手火山ネット」を覗いてみて下さい。

http://www.npo-tebiyama.org/

特定非営利活動法人　手火山　設立趣旨書

1　趣　旨

現在、日本の食文化は大きく変化してきています。早さ・便利さを満たす加工食品が増えていく中で、日本の伝統的食文化の中心となって受け継がれてきた鰹節は地域の基幹産業でもありました。しかし、日本の漁業が衰退していくなかでこのような鰹節製造等の関連産業は縮小し地域経済は停滞してきております。

一方、都市の人々を中心に漁村の持つ美しい景色や豊かな自然に「いやし」や「やすらぎ」「体験学習」などを求める声を聞くようになりました。このことから地域にある自然・漁業と水産加工の資源・文化を再活用することによって漁村での体験学習・ショートステイ等を実施し都市の人々との交流を行い地域の活性化に貢献して行く積りです。

地域の伝統的鰹節製造方法である「手火山方式」を継承し、また鰹節が調味料以外にも健康維持・疲労回復に良いことを広く情報発信し、まちおこしや地域の活性化に寄与していきます。日本食が国際的に広まる中で鰹節をＰＲし国際商品として消費拡大に寄与していきます。海外の鰹節生産地と交流し技術指導などを通して国際協力に貢献します。

このような活動を行うにあたって、公正かつ透明性の高い運営を行い、社会的な信用を得て幅広く活動していくために特定非営利活動法人を設立し、市民有志による自立した活動を展開していこうとするものです。皆様のご理解と幅広いご支援をお願い致します。

＊＊＊＊＊＊

皆さんから頂いている質問「手火山」とは何かについては「手火山ネット」にも載せてありますが少しだけお答えしておきます。

人類が昔「火」を使い始めてから料理はずっとマキ（タキギ）の上でやってきました。
少し経つにしたがって「オクド＝竈＝カマド」を使うようになります。
鰹節つくりも「カマド」＝「火山の上」で仕事をしたことからこの作業を「手火山方式」といいます。焙乾（バイカン）という作業です。鰹節つくりでは最も重要な工程です。

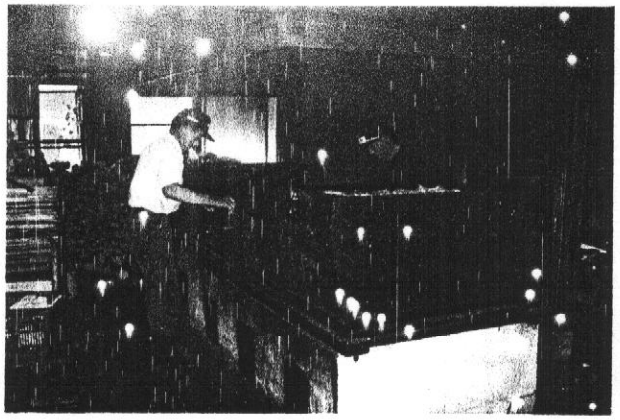
日本で作られてきた鰹節はこの手火山方式を何百年も使っていましたが、昭和４０年代に世の中は工業化と効率化を求めた為、今の焼津式乾燥機などに移ってきたわけです。

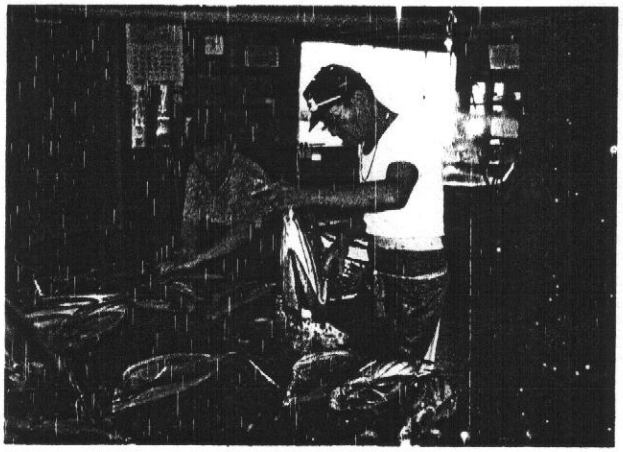
私がこだわるのは「手火山方式」は直火（ジカビ）＝輻射熱ですが今の方式は対流熱を使っている事です。

人類は長い間、料理は輻射熱を使って作ってきました。炭火（輻射熱）で焼くと魚も肉も餅もごはんも旨い。何故そうなのかという理由は私には分かりませんが確かです。
分かっている方が居ましたら教えてください。

このように私達の生活のなかで効率や工業化という流れの中で日本に伝統的に伝わってき

たすばらしいものが消えていっています。私の住む町にも無くなったもの、無くなりつつあるものがあります。このような物を掘り起こし検証し、継承してみたいという思いをこめて「手火山」という名前にしました。
どうぞ私共の趣意にご賛同される方は仲間に入っていただけませんか。お待ちしています。





ビトゥンと鰹節

長崎　節夫

去った10月19日のことですが、日本のあるテレビ番組の撮影クルーがビトゥンに来ました。「鰹節の加工場を撮影したい」ということで大岩さんといっしょに市内の鰹節工場（MANADO MINA社）に案内しました。この工場は前に川口さんといっしょに一度いったことがありました。

工場側との型どおりの挨拶のあと、さっそく撮影にはいりました。テレビ番組の撮影というのは私もはじめて見るので興味深く、カメラのうしろについてたっぷり見学させてもらいました。

この日撮影の番組は12月1日午後8時TBS系のチャンネルで放映されたそうです。私はちょうど沖縄に帰省中で、当日は見逃しましたが次の日の午後8時にビデオでみました。「世界、ふしぎ発見」とかいうクイズ番組です。長寿番組だそうですが私ははじめてみました。この日の放送はスラウェシ島に題材をもとめたクイズ番組でしたが、ビトゥンの鰹節工場の場面はほんの数秒、あっという間に画面が変わっていました。6名のスタッフがビトゥンまで来て、あれだけ丹念に撮影して放映は数秒とは。

それはさておき、ビトゥンにからんだクイズは、はじめに鰹節をふくめて4種の物産名を並べ、「さて、スラウェシから日本に輸出されているものは何だろうか」というものでした。かつおぶし、とあてた人がひとりいました。

川口さんが「タルシウス」にたびたび文章を寄せられているとおり、ビトゥンのかつおぶしにもそれなりの歴史があります。「ビトゥン」という港町の発祥そのものが昭和戦前期の日本人によるかつお漁業の開拓と軌を一にしています。立地条件のよさ（ビトゥンの北、東、南の海はカツオの漁場）、船の出入りに適した地形、MANADO,TOMOHONなど近くに消費地があること、などにひかれてかつお釣り漁業者がこの地に目をつけたと思いますが、それまでの家もまばらな寒村に人口が増え、かつおぶし工場ができ、出入りする漁船が増え、そのことがまた連鎖反応を起こし、という具合に次第に漁業基地として発展しました。当時の漁業開発（ビトゥン振興）の中心人物が大岩トミさんの父親の大岩勇であり、彼のまわりでかつお釣り、鰹節加工など操業の第一線で活動したのが沖縄出身者を主体とする漁師たちでした。ビトゥンの日本人墓地の墓標は、このような戦前期のビトゥンにおける日本人の活動を示す貴重な史料でもあります。またビトゥンに今も残るかつお釣りの技術や鰹節加工の技術は彼らが残した無形資産です。この事例は海外に於ける日本人漁業者による技術移転の成功実例だといえます。

たしかにビトゥンの鰹節は70年以上も前から生産され日本にも輸出されていますが、もう少し詳しく言いますと現在輸出されているのは日本の店で商品として並べられているような「かつおぶし」ではありません。ビトゥンから出されている鰹節は、主に削り節（花

かつお）の原料になるいわゆる「原料節」です。これを日本で削り機にかけ、パックに詰め、最終的な商品としてスーパーマーケットなどで売られているわけです。かつおぶしを使い慣れた人ならご存知のとおり、このパック詰めの削り節は単位重量あたりの値段はベラボーに高く、味は悪い。それでは何故、値が高くて味の抜けたものを客が買うのかというと、「便利だから」、という理由だけのようです。「硬いカツオブシをカンナで削ってダシをとる」そんなのんきなことやっておれるか、ということでしょうか。ほんとに味のない世の中になったものです。「かつおぶし」というのは使う直前にカンナで削ってつかうものだと思いますが。

「削ってパック詰め」は味がぬける原因のひとつですが、カツオブシの味を決める要素はいろいろあります。ひとつは原料となるカツオ自体の問題です。おなじカツオの仲間でも泳いでいる場所によって肉質が違ってきます。日本近海を泳ぐカツオはアブラがのって味もよくなる。ビトゥン近海をふくめて、熱帯の海で泳いでいるカツオは一般にアブラが抜けていて旨みがおちる。（しかし鰹節に加工するにはアブラの乗りすぎた肉はよくないそうです）。また、同じ海域で泳いでいるカツオでも小型（若い）魚と大型魚では味が違います。先日の工場で見た原料魚は１キロから２キロ程度の小型魚（まき網で漁獲されたカツオ）ばかりで、これでは旨いかつおぶしは最初から望めません。また、一匹の大型魚から作られたカツブシでも腹側の身と背中の身で味も値段も変わりますが、それはそっちに置いて。カツオブシの味を左右する要素で原料魚に関していえば、上に挙げたほかにもうひとつ大事なことがあります。カツオの漁獲方法（竿釣りか巻き網か）と漁獲されてからカツオブシ加工をはじめるまでの処理・保存方法です。簡単にいえば釣られた魚と網に巻かれた魚では、釣られた魚が旨い。冷凍された魚とナマの魚ではナマが旨い。現在、ビトゥンではカツオブシの原料魚のほとんどを巻き網の漁獲にたよっています。その背景をいま論じる余裕はありませんが、論じるべき問題ではあると思っています。

さて原料のカツオが工場に運び込まれていよいよカツブシ加工工程に入るわけですが、その工程を以下に略記します。

1．生切り　　：カツオのアタマを落とし、骨（背骨）をはずす。魚体のサイズや加工目的によって工程が異なる。小型魚の原料節目的ならアタマを切り落とすだけで終了。
2．煮熟　　：なま切りを終えたカツオの身を煮かごにならべて煮釜で煮る。魚体の大きさや鮮度の状態によって釜の水温や煮る時間を変える。担当者にしかわからない特殊技術になる。
3．バラ抜き（骨抜き）　：煮あがった原料にのこっている骨を除去する作業。小型魚の原料節ならここで背骨をはずす。ここは最も多くの女工さんの手が要る。
4．修理　　：モミ付け。煮熟や骨抜きの際にできたキズをミンチしたかつお肉を使って修理・成型する作業。ほとんど女工さんの手仕事になる。原料節加工ではこの工程

は省かれる。

5．ばいかん　：バラ抜きを終えた原料をセイロに並べて乾燥・燻製する作業。カツオブシ加工のクライマックスである。セイロばいかん（露地バイカン）、棚バイカンと、いわゆる焼津式バイカンなどがある。

6．整型　　：「削り」ともいう。バイカンを終えて十分に硬くなった節の表面を削って整形する作業。原料節加工ではこれも省略。

7．カビ付け　：カツオブシに青カビを付かせ（一番カビ）、それをふき取ってまたカビを付かせ（二番カビ）、ふつう三番カビまで行う。カビを付かせることによって節の乾燥がすすみ味が濃縮される。カビ付けを終えた節がいわゆる本枯節である。もちろん原料節加工ではこの工程は省かれる。

以上の加工工程のなかでも「バイカン」は最重要な部分ですが、現代の世知辛い合理主義によって、その方法が従来の「手火山方式」から「焼津方式」に変わってきました。先日のテレビ撮影の工場も焼津式でした。ビトゥンには他にも何軒かの鰹節加工場がありますがすべて焼津方式のばいかんです。「焼津方式」というのは川口さんが書かれているとおり、ひとつの庫（乾燥庫）に煮熟・骨抜きの終わったかつお肉を（セイロにならべてそれを積み上げて）詰め込み、庫外から熱風（燻煙）を送り込んで乾燥燻製を行う方式です。庫に原料をぎっしり詰め込む、というところがミソです。単位面積あたりの原料魚肉収容量が多く、大量生産に適しています。技術的にも楽です。反面、庫外から熱風を送り込んで燻乾をおこなう、いわば間接的な燻乾になるのが弱点になります。

従来の手火山方式（棚バイカン）というのは、一戸の建物全体を乾燥装置として使うやりかたです。建物の上部に天井板のかわりに竹製のすのこで2層または3層の床（棚という）を掛け、この棚に「セイロばいかん」を終え半乾燥状態になった「なま節」を並べ、棚の下の地面に薪を燃やして乾燥・燻製を行います。薪は建物の面積に応じて数箇所燃やします。生節をならべる棚は平面の広がりはあるけれども立体的にはせいぜい3段しかできません。またこの棚に原料をならべる作業が大変です。乾燥の進み具合をみて並べ替えたり、上段の棚の節が乾燥を完了したら下段の節を順次繰り上げるという作業などもあって、大変な労力を要します。この方法は大量生産には向きません。しかし面積の広い棚に節をならべて直火でゆっくり燻すうえに、燻乾の途中でもこまめにならべかえたりして、いわば手作りの味も見栄えもいい品物ができあがるのです。本物の味を追求するならやはり手火山方式となるでしょう。現在の焼津方式バイカンと手火山方式を比べるなら、たとえば電気炊飯器でメシを炊くのと竈で薪を燃やして炊くことの違いではなかろうか。同じ米でも旨みが全くちがいます。

というわけで川口さんとその仲間は本来のかつおぶし加工技術を守りかつ普及させるべく、ついにNPO法人を立ち上げたということです。効率至上主義の風潮に流されて、私達の身の回りには原点を見失ったものが多々見受けられます。時には立ち止まってゆっくり

考えるような余裕を持ちたいですね。

昨今の鰹節をとりまく状況は波乱含みで、鰹節生産の本場である枕崎でも経営がなりたたずに手仕舞いする工場が多いとのことです。ビトゥンでも10年ほど前のリポートと現況はかなり変わった感じがしますが、せっかく先輩たちが育て上げた産業ですから何とかして発展してもらいたいとおもいます。

北スラウェシの鳥人

長崎　節夫

いまから6年前の12月のある日、ビトゥンで不思議な事故がありました。その頃、ビトゥンの中心地ともいえる商店街の一角に4階建ての（ビトゥンで最高層の）建物が立ち上がったばかりでしたが、まだ完成前のその建物の軒下にひとりの婆さんが虫の息状態でうずくまっていたそうです。婆さんがそこにうずくまったそもそもの原因は、夜、空を飛んでいてそのビルに衝突したというのです。

「それじゃあ婆さんは自爆テロに失敗したのか」と思いましたが、どうもそうではないらしい。婆さんの目的はビルの爆破ではなく、新生児の生き血を吸うことにあったらしいが、事前の偵察が不十分で、ちょうど立ち上がったばかりのビルの存在に気がつかず、不覚にも衝突してしまった、というのが真相らしい。

この話を近所のおばさん達から聞いて、私は驚きました。西洋の吸血鬼は映画で見たことはありますがここにも吸血婆さんがいたのか。さっそく誰かれなくつかまえてはこのことについて尋ねてみました。なかには「おまえはビトゥンに何年もいながらこんなこともしらなかったのか」。という顔をするのもいましたが、皆さん丁寧におしえてくれました。努力のかいあって今までに知りえたことを以下にならべてみます。

1. 空飛ぶ吸血婆さんの名称は地方によりまちまちで、ミナハサ地方ではpak-pak（パクパク）、ヌサテンガラ地方ではLeak（リアク）　とよばれる。
2. ほぼインドネシア全域に分布する。
3. 世襲性である。若いときからしこまないとうまく飛べないらしい。（祖母がパクパクであったという三十代の女性に会った。あとを継ぐようにと祖母に言われたが、いやだからにげてきたそうだ。）
4. この婆さんは普段はフツウに生活している。まわりの人はうすうす知っているが、面とむかって尋ねたり問いただすようなことはしない。（しかえしが怖い）
5. 新鮮な血をこのむがとくに新生児の血が大好きである。出産のときに出るものも好物である。
6. 夜行性である。夜、赤ちゃんをひとりねかせてはならない。
7. 飛行する前にお祈りをする。（念力によって飛行するのではないか）

以上、空飛ぶ婆さんについての私の調査報告です。

編集後記

平成の御世も20年目を迎えました。20年前の1月に何処にいたのか思い出してみると、昭和63年（1998）の正月前後、私はフィリピンの船員達とミクロネシア海域でマグロ獲りに血道をあげていました。クリスマス直前の12月20日（1997）にミンダナオ島のゼネラルサントス港を出発して24日の晩は第一回目のアゲ縄作業。釣り針にヨシキリザメがかかってきたのでフィリピン船員がはき古したスニーカーを一足プレゼントして海に帰しました。ヨシキリちゃんは礼もいわずに泳いでいきましたが喜んでいたのかどうか。

今回のタルシウスはタイミングよく新年号となったので会員みなのご挨拶を頂くべく張り切ったのですが、正月で帰国された方が多く、期待はずれにおわりました。12月の早い時点で準備すべきであったと反省しています。

後藤総領事も帰国されたようですが、竹森さんはじめ在勤の皆様からごあいさつをいただきました。今年もまたよろしくおねがいいたします。

広島の大之木さんからもご挨拶をいただきました。元山記念霊園も公式の慰霊祭は昨年度をもって終わりとするそうですが、今後も何らかの形で慰霊の意を表すべきだと思います。霊園の管理も日本人墓地の管理とあわせて地道にやっていればなんとかなるでしょう。

石野さん、川口さん、上杉さんからも原稿をいただきました。上杉さんは前号掲載予定の原稿が一日おくれで間に合わなかったので今号はダブルの掲載です。ダブルでもトリプルでも大歓迎です。また送ってください。

編集子も腹を切られてから一年、体力も回復したので今年はもっとがんばります。ご協力をおねがいいたします。